

# 26P-pm232

理礼氏薬物学(第十三卷)にみる薬物

○久保 光平<sup>1</sup>, 大垣 旭<sup>2</sup>, 小松 知貴<sup>2</sup>, 島 和嗣<sup>3</sup>, 畠山 貴博<sup>4</sup>, 小松 直登<sup>5</sup>, 木村 壮太郎<sup>6</sup>, 澤田 采佳<sup>7</sup>, 西野 ゆり<sup>8</sup>, 林 優樹<sup>9</sup>, 西野 正雄<sup>10</sup>, 菰田 綾佳<sup>11</sup>, 宮本 如奈<sup>12</sup>, 高倉 弘士<sup>13</sup>, 畠山 有里<sup>14</sup>, 畠山 光弘<sup>15</sup>(<sup>1</sup>四天王寺羽曳丘高等学校, <sup>2</sup>河南高等学校, <sup>3</sup>金剛高等学校, <sup>4</sup>初芝富田林高等学校, <sup>5</sup>東住吉高等学校, <sup>6</sup>藤井寺高等学校, <sup>7</sup>西浦高等学校, <sup>8</sup>長野高等学校, <sup>9</sup>富田林高等学校, <sup>10</sup>早稲田大学, <sup>11</sup>関西福祉科学大学, <sup>12</sup>同志社大学, <sup>13</sup>立命館大学, <sup>14</sup>長崎大学, <sup>15</sup>畠山獣医科診療所)

「はじめに」・・明治五年に刊行された理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第十二巻全文を解説し紹介する。

「内容」・・巻十二巻では吐薬を扱っている。

吐根、サンギエイナリア、ロベリア、ギレニアが扱われ、催進官能の薬が説明されている。

この類の薬は、まず、器官の官能性を侵し介達の作用を全身に及ぼし、各器官を刺激し、直ちに分泌を増加させ作用を表す。そして、吐薬は薬品の衝動性、分量及び臭気に拘わらず、一種固有の能力で嘔吐を誘起するものと説明されている。

「考察」・・現在吐薬は催吐薬と呼ばれ、嘔吐を誘発させることによって胃の内容物を吐かせることを目的とした薬を指す。主な薬剤としてエメチン、アポモルヒネ、プロモクリプチンなどがあるが、ここで紹介されているロベリアも、塩酸ロベリンを含み、催吐及び呼吸興奮作用がある。遠西醫方名物考の巻一に、シーボルトの治療薬「十八道薬剤」にある乙百葛格安那が含まれているが、同じく十八道薬剤である安質没、細辛、烟中、丹礬及び白丹丸、蒲勞蛤勿印私的焉、謝亜印等はここでは紹介されていない事を奇異に感じた。